



大学院学術目的の英語（EAP）ライティング授業：
研究にもとづいた授業実践の必要性と課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-01-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤岡, 真由美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017884

大学院学術目的の英語（EAP）ライティング授業 —研究にもとづいた授業実践の必要性と課題—

藤岡 真由美

著者が大阪府立大学における大学院共通教育科目である「Academic Writing A」を2016年度から担当して6年が過ぎた。これまで授業での実践を主として応用言語学の観点から論文として報告し（Fujioka, 2017, 2018）、また4年を終えた時点での振り返りも報告してきた（藤岡、2020）。2020年の報告の後、コロナウイルス感染拡大のためオンラインで授業を実施するという変化が生じたことに加えて、著者は「学術目的の英語 English for Academic Purposes (EAP)」の分野での教師の成長を課題とする研究に着手した。¹ さらに、2022年度からも本授業は新大学である大阪公立大学で「Academic Writing」として開講され、著者が担当者の一人となることとなった。以上のここ2年間に渡る新たな変化をもとに、また、今後の授業改善を目指して大阪府立大学での6年間の実践をあらためて振り返り、特にEAPの研究にもとづいた授業実践の必要性と課題について論じる。

本稿ではまず、EAPの定義を紹介し、「Academic Writing A」の授業内容を定義と照らし合わせる。次に、EAPの研究にもとづいた授業実践の必要性を授業からの具体例を示しながら論じる。さらに、研究にもとづいた授業実践について、特に教師自身が特定の種類の研究を行うことの困難な点を論じ、現実的な対応を提案する。最後に、本稿で論じたことをもとに、今後著者を含むEAP教師に求められることを記してまとめとする。

1. 学術目的の英語（EAP）の定義

Hyland (2006) では、EAP は「特定目的の英語 English for Specific Purposes (ESP)」の下位区分として位置づけられ、ESPと対局をなすのが「一般目的の英語 English for General Purposes (EGP)」である。Campion (2016, p. 60) は、Strevens (1988) を引用し、EAP/ESPの定義を以下のように提示している。

(EAP/ESP is:)

Designed to meet the specific needs of learners

Related in content to particular disciplines, occupations and activities

Centered on the language appropriate to those activities

In contrast with ‘General English’

学習者の特定のニーズに合うように作成されていること
内容が特定の学問分野、職業、活動に関連していること
特定の学問分野、職業の活動に適した言語に焦点をあてていること
「一般目的の英語」とは対照をなすこと

(藤岡日本語訳)

著者はこれまで授業実践を上での定義に意識して合わせてはいなかったが、結果として授業の要素は上の定義に合っていると考える。まず、「学習者の特定のニーズに合わせる」について、受講生は大学院生としてこれから自分の研究を英語で論文として発表する必要性があり、そのために英語論文の書き方を学ぶという明確なニーズを持っており、「Academic Writing A」はそのニーズに応える授業として提供されている。次に、「特定の学問分野の内容に関連していること」については、学生に自分の分野における代表的なジャーナルに掲載されている論文を複数検索させ、授業内容に即して言語的特徴を分析させ、さらに自分の研究にもとづいた英語論文の一部を実際に書かせている。こうした学生の専門分野の論文をもとにした言語的特徴の分析は、3番目の「特定の学問分野における言語に焦点をあてること」に対応している。さらに、学生の専門分野に関連した英語の分析および自分で論文の一部を作成することは、最後の「一般目的の英語とは対照をなすこと」に合致する。

このように、著者の実践する授業の内容はEAPの定義に合っているが、「特定の学問分野に適した言語に焦点をあてる」という要素については、「研究にもとづいた授業実践 research-informed practice」が必要である。以下のセクションでは研究にもとづいた授業実践に関して、著者の授業での具体例を紹介する。

2. 研究にもとづいた授業実践の必要性—具体的事例

EAPを原則にもとづいて実践するためには、教える方法と教師の学術英語に対する知識が重要である。教える方法について著者は、6年間の実践で一貫してジャンルアプローチを使用してきた。ジャンルアプローチ（例Hyland, 2004）とは、書き手が目的を伝えるために一定の約束事のもとに構成されたテキストがジャンルであり、その約束事のパターンの記述にもとづいて教える教授法である。例えば、様々なジャンル（例 学術論文、新聞のニュース報告、Power Pointのスライド、ビジネスの取引に関する文書）を考えると、それらのジャンルには構成面と使用される言語構造や語彙において一定の特徴がある。ジャンルアプローチでは、学習者は自らが必要とするジャンルにおいてそれらの特徴を学び継続して学習することにより、そのジャンルを熟達して使えるようになることを目標とする。

「Academic Writing A」においては、目標とするジャンルはデータにもとづく実

証系の学術論文とした。15回の授業の約半分を、Abstract, Introduction, Method, Results, Discussion, Conclusion の各セクションに分けそれぞれの構成面と言語的特徴を、EAP分野における学術書および論文などの出版物から得た情報をもとに学生に提示し、次に学生が自分の研究分野のジャーナルに掲載された論文を複数調べて、授業で導入した構成・言語的特徴とどの程度一致しているか、一致していない面があれば各自の専門分野との関係から来る理由を報告させた。各セクションの特徴を学術出版物から得た情報をもとに授業を構築している点においてすでに「研究にもとづいた授業実践」に当てはまり、拙論 (Fujioka, 2017, 藤岡, 2020) において Introduction のセクションについて参考にした学術出版物の内容と授業での導入例を紹介した。しかしながら、それらの報告がなされた時点から、著者に研究にもとづいた授業実践の必要性を再認識させる事態が生じたため、ここではその新しい体験を報告する。

学術論文の Introduction のセクションについては、Swales (1990, 2004) が研究を開拓し、Introduction の論理の流れをムーブとステップという概念を使って示した。その後、Cortes (2013) が、語連鎖² (lexical bundles) の概念を付け加え、コンピュータによる論文コーパス³ の解析にもとづき、Introduction の各ムーブとステップには特定の語連鎖が現れる頻度が高いことを示した。Swales (1990, 2004) と Cortes (2013) の研究結果にもとづき、Introduction の書き方を示すために、著者は授業のハンドアウト⁴ として以下を提示した。

Introduction (序論) の一般的な流れ (ムーブとステップ) および各ステップの下でよく使われる語連鎖の例

ムーブ 1 研究領域の確立

ステップ 1 トピックの重要性を示す

In the field of, one of the most important, play an important role in the

ステップ 2 トピックの背景情報を示す

It has been shown that, has been shown to, it is well known that

ステップ 3 先行研究を概観する

Studies have shown that, it has been suggested that

この後次のムーブに移行するとき、**however, but, though** などの表現が用いられることが多い

ムーブ2 ニッチ (niche) の確立

ステップ1 A 研究のギャップ (今までの研究において欠落していること) を示す

Little is known about the, it is necessary to

または

ステップ1 B 研究で明らかになっていることに追加を示す

ステップ2 今までの研究を踏まえさらなる研究の必要性を述べる

There is a need to, a better understanding of

ムーブ3 自身の研究を提示する

ステップ1 自身の研究目的を述べる

The purpose of the present study was to

purpose は aim, objective など置き換えられる場合もある。

the present study は this study となる場合もある。

was は is と現在時制となる場合もある。

ムーブ3のステップ2から7についてはここでは省略

以上の例が2016年度から2019年度までの4年間、学生に提示したハンドアウトの例である。ここで注目したいのは、「ムーブ3 自身の研究を提示する」のステップ1「自身の研究目的を述べる」について紹介している語連鎖の例が、*The purpose of the present study was to* および一部の単語を入れ替えた例だけであるという点である。この一例を選んで提示した理由は、出典であるCortes (2013, p. 39) に*The purpose of the present study was to* およびその一部の単語を入れ替えた例が数多く掲載されているということであるが、おそらく著者の専門分野である応用言語学においても一般的に使われるわかりやすい研究目的の書き方であるという理由であったと考える。

しかしながら、最初の4年間の授業実践の間に徐々に気がついたことは、学生の検索した論文の例においても学生自身が書いた論文のIntroductionにおいても、*The purpose of the present study is/was to* という研究目的を表す典型的な表現が選ばれる例は少なく、むしろ*We examine/investigate/show* などの表現が多いということであった。こうした現実から、2020, 2021年度の授業については、研究目的の表現方法について以下のように記した。

ステップ1 自身の研究目的を述べる

The purpose of the present study was to

理系論文においては、研究目的を表すときに以下の言い方もよく使われる。
Here we report ..., Here we show ..., Here we investigated ...
In this study we report ..., In this paper we examined ...

このように学生が選んだ表現の事例から授業内容の一部修正を行ったが、なぜ *The purpose of the present study was to* という表現ではなく、we を主語にして能動態の動詞という形が好まれるのかまでは自分で理由を調べたりその理由を記した論文を探したりという作業まではしていなかった。

最近になって、著者のこうした疑問に対する答えが学会発表で示された。河本・石井（2021）は自分たちの独自に開発した論文コーパスから生命科学系論文におけるムーブとステップを分析し、Introduction において「本研究」についての言及および研究目的を表す表現として、*Here/ In this study, we show/report/describe* が典型的であると報告した。これは、著者の授業で学生が提示する表現例の傾向と合致している。さらに、保田（2021）も工学、生物学、社会学、応用言語学の分野からなる多分野科学論文コーパスを作成し、科学論文における文体の通時の変化を分析した。それによると、科学論文においては「一人称を使ってはならない」というのが通説であるが、1980年代以降主観の排除という通説に異を唱える議論が始まり、21世紀の科学論文において書き手は様々な表現で主観を表しているとしている。保田の議論にもとづき、現在の科学論文では書き手が主観を表すことが認められる、あるいは場合によっては主観を表したほうが望ましいとするのが潮流であれば、学生が提示してきた、および河本・石井（2021）が研究結果として証明した *we* プラス能動態の動詞という研究目的の書き方に納得がいく。

EAP を教える教師は学術英語についての知識を要することが絶対に必要であり、その知識を学術出版物から得て授業実践につなげる時点で「研究にもとづいた授業実践」は遂行していると言える。しかしながら、著者の授業例で見た通り、学術英語においてよく使われる表現は時とともに変わる。2016年の授業開始時ではCortes（2013）が最新の研究結果であったかもしれないが、それから年月が過ぎ研究の結果も日々更新されることを考えると、EAP教師は常に最新の研究結果にもとづき自分の学術英語に対する知識をアップデートし、さらにその知識を授業に還元していく作業を行う必要があると言える。

3. 研究にもとづいた授業実践遂行の課題

EAP教師の研究にもとづいた授業実践（research-informed practice）には、教師がEAP 研究を読むということと教師が実際にEAP 研究を行う二つの種類がある。Bahrami, Hosseini and Atai（2019, p. 155）はこの二つをEAP teachers' engagement with researchとEAP teachers' engagement in researchと言う英語表現で区別している。著者の授業の場合、EAP研究を読むということが中心で、前者のengagement

with researchに該当する。それでは、著者自身あるいは他のEAP教師が自分で研究を行い、その結果を授業に取り入れる後者のengagement in researchとしての研究にもとづく授業実践は可能であるか、あるいはどこまでのことが可能であるかについて以下論じる。

Charles (2013) はEAP研究と実践のアプローチを“corpus-based work, genre analysis, and investigation of the social context” (p. 137) の三つ、つまり「コーパス研究、ジャンル分析、社会的コンテキストの調査」に分けている。上記のCortes (2013)、河本・石井 (2021)、保田 (2021) がコーパス研究の例である。こうした研究はEAP分野の発展と進化に多に貢献してきたが、未開拓の分野やジャンルがある (Charles, 2013)。コーパス研究を行うには、研究者が多くの時間と専門知識を駆使してコーパスを構築し膨大な言語データの分析をする。教師が授業のためにそうしたコーパスを自分自身で開発し、目標となる言語構造や語彙の使われ方の分析をすることは大変な労力を要する。さらに、「Academic Writing A」授業は大学院共通教育として開講されているため、受講生が所属する研究科は多岐に渡る (藤岡、2020 参照)。例えば工学研究科だけに絞ったとしても、工学の分野の中でさらに研究領域は細分化されており、加えて理学系、生命科学などの理系分野から経済学などの社会科学分野に至るまで受講生が広範囲に渡る状況を見ると、全ての分野を対象とした言語コーパスを構築し、分析をするという作業は大変困難である。

次に、二つ目と三つ目の「ジャンル分析、社会的コンテキストの調査」については受講生を対象とした研究となり、多くの制約がある。ジャンル分析では、例えば学生の作成したライティングのムーブを分析する、あるいは初稿に対する他の学生や教員からのコメントをもとに改訂稿においてムーブがどのように変化、改善されているかの分析をすることが考えられる。三つ目の社会的コンテキスト調査では、学生にインタビューを行ったり、学生の研究室での様子 (指導教員および他の学生との研究に関わるやりとり) を観察したりして、学生のアカデミックライティングを取り巻く環境と構造を詳細に分析することが求められる。実際著者は、2016年の授業開始当初にこうした研究を考えていたが、授業実践を通じて受講生を対象とした研究には慎重になるべきとの結論に至った。

慎重になるべき理由の第1点目は、受講生の時間的な制約である。2016年の開始から当初の4年間は全て対面授業であったが、受講生が全員授業に揃うということが難しかった。学部生と違って大学院生は学会参加、学会発表の準備などで忙しく、さらに工学系の院生は実験などで毎週決まった時間に英語の授業に参加すること自体が難しいということがわかった。そのように忙しい院生に対して、授業参加の上に研究参加を依頼しインタビューのために時間を取ってもらう、あるいは研究室での様子を観察させてもらうなどのことは極めて困難である。

第2点目に、学生の心理的負担を考える必要がある。2016年度に本授業を対象として研究を行った際には、高等教育推進機構の研究倫理委員会に申請をして承認された

上で研究を行った (Fujioka, 2017 参照)。今後も研究を行う上では同様の措置を取ることが当然である。しかしながら、研究申請書および学生への研究協力依頼への同意書において、教員の研究への参加・不参加が学生の本授業の成績には一切関係がない旨を明記しても、やはり学生は心理的負担を感じるかもしれず、教師としてその点は十分に考える必要がある。

最後に、特にジャンル分析において学生の作成したライティングにはさらに慎重を要する理由がある。本授業においては、1の「学術目的の英語 (EAP) の定義」の中で述べたとおり、学生自身の研究の内容をもとに、英語論文の一部を書かせている。学生自身の研究は現在進行形であり、これから研究発表、出版として公表されるということを考えると、その内容を本授業からの研究の一部として公表することは差し控えるべきと考える。たとえ研究目的が前述のとおり学生が書いた英文のムーブ分析であったとしても、英文の中に研究内容が含まれているのであるから、本授業からの研究目的としての使用はやはり慎重にすべきである。実際、2020年度に受講した学生の一人が、授業が終わって数か月してから本授業で作成したライティングをもとに論文を完成させ、学術誌に投稿をしたとの連絡をくれた。このように、実際に学生は本授業でのライティングをもとに自分の研究を発表していくので、やはり授業が行われている期間において学生のライティングをデータとして収集するのは控えるべきである。現実的な対応としては、先に紹介した学生の事例のように、学生の論文が出版された後で、授業期間に作成したライティングと最終的な論文を比較し、授業で学んだことを振り返ってもらい論文作成時に役立ったことを答えてもらうなどの方法が考えられる。

以上、著者の授業をもとに考えると、研究にもとづいた授業実践について、教師自身が研究を行う engagement in research としては、コーパス研究、ジャンル分析、社会的コンテクスト調査いずれにおいても実施は容易ではない。上に記した制約、困難な点は著者だけでなく、おそらく EAP ライティング授業を担当するどの教師にもあてはまることであると思われる。

4. EAP 研究を読むことから EAP 実践研究との対話へ

これまでの議論から EAP ライティングにおける研究にもとづいた授業実践の遂行では、著者が実践している EAP 研究を読んで授業実践に取り入れることが現実的な対応であると考えられる。しかしながら、上述の EAP 研究を読むとは、コーパス研究などに代表される学術英語の特徴について他者の研究成果を読む (または学会発表を聞く) ということまでに限定され、授業で研究成果をどのように取り入れるかは自分で考えた。ここでは一歩進み、他者の EAP 実践研究を読みそれらの研究と「対話をする」という視点を取り入れることの重要性について記す。

まず EAP 実践研究とは、学術英語の指導について授業での実践やライティング指導の詳細を紹介している論文あるいは報告のことである。さらに、それらの研究と

「対話をする」とは、自分の教えているコンテキストや学生の状況と比較し、自分の授業に役立つ点を拾い出すとともに、授業実践をした論文の著者や教師に対して、自分自身を投影したり共感したりするということである。

例えば、著者の使用しているジャンルアプローチに関して、Li, Flowerdew and Cargill (2018), Huang (2014) の例を紹介する。Li, Flowerdew and Cargill (2018) では、オーストラリアに拠点をおくEAP 教師が中国において開催している英語で学術論文を作成するための出張講義の詳細を紹介している。その中で、論文の Introduction の構成と書き方の指導法のスライドなども紹介されており、著者の授業での Introduction の構成と書き方の指導法では加えていない plagiarism (剽窃) を避ける説明と練習が取り入れられていることを学び今後の参考にしたいと考えた。次に、Huang (2014) からは台湾の大学院生への英語論文の書き方の指導について、ジャンルアプローチにおける著者の授業との共通点を見出し、さらにムーブの捉え方と学生への説明の仕方に共感した。2 の具体的事例で述べたとおり、著者の授業において学生に自分の分野の論文を複数検索させモデルとして授業で使用させているが、Huang (2014) においても同じ方法が紹介されている。さらに、Introduction の流れにおけるムーブに関して、著者の授業では提示されたムーブをルールのように捉え自分が検索した論文のムーブと一致しない場合は戸惑う学生も過去にいた。その点に関して、Huang (2014, p. 178) は以下のように述べている。

The students were frequently reminded that moves and linguistic features should be seen as resources instead of rules; when what was taught in class was inconsistent with the students' genre analysis ..., they were advised to conform to their analysis and continue taking note of variations in language use in different journals.

「(授業で提示する) ムーブおよび言語的特徴はルールではなく、リソースとして捉えられるべきものであることを覚えておくように学生は何度も言われた。授業で教えられたことが学生自身のジャンル分析と一致しない場合は、自分自身の分析に従い、様々なジャーナルにおける言語使用の違いについて継続してメモを取るよう助言された。」(藤岡日本語訳)

著者はHuangのこの指導アプローチに共感し、Huang の論文を読んだ次の年から自身の授業でも同じように学生に伝えている。

次に国内の研究では、山西 (2021) が著者と同じく大学院共通教育の一環としての Academic Writing 科目をオンライン授業で実践した報告をしており、著者の授業との比較において大変参考になった。山西の授業と著者の授業の共通点は学生の専門分野が多岐に渡ることであるが、異なる点は著者の授業が原則博士課程前期の学生対象であるのに対して、山西の授業は博士課程前期、後期の学生および先行履修として学部の 4 年生も受講できる点である。さらに、山西の授業では学部レベルで学習し

た英語ライティングを振り返りつつ、それらをさらに発展させ学生の研究分野に関連させて、Comparison and Contrast, Cause and Effect などの構造をもとに複数パラグラフの作成練習を行い、学生の研究テーマに関する Abstract の作成をさせる。一方で、著者の授業の場合は、前述のとおり学術英語論文を目標ジャンルとして設定し、最初から論文のセクションごとの言語的特徴に焦点をあてた授業構成とし、学生自身による論文の一つのセクションの作成を実施している。著者のこうした授業実践は、Hyland (2007) が主張する、学生が将来必要とするジャンルを目標として設定するというジャンルアプローチの原則に従っているからである。そのため、山西のように学部段階での英語ライティングの復習を兼ねたパラグラフ作成練習は実施せずまた想定もしてこなかった。しかしながら、著者の 6 年間に渡る授業実践を振り返ると、学部レベルでの英語ライティング作成能力も十分に習得できていないまま大学院の Academic Writing 授業を受講する学生もいることは確かである。こうした経験にもとづくと、山西のように学期の最初には学部レベルの英語ライティングを復習する機会を与えたほうが良いのか考え始め、ここに山西の授業実践報告との対話が始まった。

以上三つの EAP 実践論文・報告を挙げ、それらが著者に自身の授業との比較をもたらし、共感した点を自身の授業に取り入れたり、授業改善をさらに考える機会を与えてくれたりした点において、他者の研究との対話が成立していると考ええる。

5. まとめ

本稿では、著者が担当している大学院共通教育科目である「Academic Writing A」における 6 年間の実践を振り返り、学術目的の英語 (EAP) の定義に授業内容を照らし合わせ、常に最新の研究にもとづき教師が学術英語に対する知識をアップデートする必要性と授業実践への還元を論じた。さらに、研究にもとづいた授業実践をする際に、EAP 研究を行う際の三つの種類とされる「コーパス研究、ジャンル分析、社会的コンテキスト調査」について、教師自身が研究を行う際のそれぞれの課題を論じ、特に「ジャンル分析、社会的コンテキスト調査」については担当授業の学生を対象とした研究遂行の障壁と教師として慎重になるべき点について述べた。こうした課題にもとづき、教師としては「EAP 研究を読む」ことが現実的な対応であるが、EAP 研究成果を読むだけではなく、EAP 実践を記した論文や報告を読み、自身の授業改善を行ったり、論文の著者の主張に共感したりする「EAP 実践研究との対話」を目指すことを提案した。

今後は「EAP 実践研究との対話」からさらに進んで「EAP 教師同士の実際の対話」を行うことが必要であると思われる。日本では大学院レベルにおいて EAP の定義に合致した授業を実践している例はまだ少ないと考えられる。しかしながら、たとえ少数の実践者しかいないとしても、著者を含めそれらの教師がお互いの EAP 授業実践について情報を共有し、さらに研究にもとづいた授業実践をともに考えていくこ

とにより、大学院生への学術英語教育の発展に貢献できると考える。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP20K00889 の助成を受けたものです。

注

- 1 謝辞参照。
- 2 lexical bundles の日本語訳「語連鎖」については、水本（2016）参照。
- 3 コーパスとは、Charles（2013, p. 138）では“a collection of texts compiled according to set criteria”と定義されており、一定の基準にもとづき編纂されたテキスト（言語データ）を収集したものを指す。
- 4 授業用ハンドアウト作成時に、Swales（1990, 2004）が提示した Introduction のムーブとステップの日本語訳については大野（2016）を参照し一部修正を加えた。

References

- Bahrami, V., Hosseini, M., & Atai, M. R. (2019). Exploring research-informed practice in English for academic purposes: A narrative study. *English for Specific Purposes*, 54, 152-165. <https://doi.org/10.1016/j.esp.2019.02.003>
- Campion, G. C. (2016). ‘The learning never ends’: Exploring teachers’ views on the transition from General English to EAP. *Journal of English for Academic Purposes*, 23, 59-70. <http://dx.doi.org/10.1016/j.jeap.2016.06.003>
- Charles, M. (2013). English for academic purposes. In B. Paltridge & S. Starfield (Eds.), *The handbook of English for specific purposes* (pp. 137-153). Malden, MA: Wiley Blackwell.
- Cortes, V. (2013). *The purpose of this study is to*: Connecting lexical bundles and moves in research article introductions. *Journal of English for Academic Purposes*, 12, 33-43. <http://dx.doi.org/10.1016/j.jeap.2012.11.002>.
- Fujioka, M. (2017). Genre-based instruction in a graduate-level English academic writing course. *Osaka Prefecture University Language and Culture*, 16, 1-15.
- Fujioka, M. (2018). Second language (L2) writing assessment in a graduate-level English academic writing course. *Osaka Prefecture University Language and Culture*, 17, 1-17.
- Huang, J. C. (2014). Learning to write for publication in English through genre-based pedagogy: A case in Taiwan. *System*, 45, 175-186. <http://dx.doi.org/10.1016/j.system.2014.05.010>
- Hyland, K. (2004). *Genre and second language writing*. Ann Arbor, MI: The University of Michigan Press.
- Hyland, K. (2006). *English for academic purposes: An advanced resource book*. London: Routledge.
- Hyland, K. (2007). Genre pedagogy: Language, literacy and L2 writing instruction. *Journal of Second Language Writing*, 16, 148-164. doi:10.1016/j.jslw.2007.07.005

- Li, Y., Flowerdew, J., & Cargill, M. (2018). Teaching English for Research Publication Purposes to science students in China: A case study of an experienced teacher in the classroom. *Journal of English for Academic Purposes*, 35, 116-129. <https://doi.org/10.1016/j.jeap.2018.07.006>
- Swales, J. M. (1990). *Genre analysis: English in academic and research settings*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Swales, J. M. (2004). *Research genres: Exploration and applications*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

参考文献 (邦文)

- 大野真澄 (2016年3月). 「ジャンル・アプローチを用いた英語ライティングの指導—理工系学術論文を事例として—」第二言語ライティングセミナー研究発表 津田塾大学.
- 河本健・石井達也 (2021年9月). 「論文執筆への応用を目指した生命科学英語論文の Move 分析—Introduction 編—」学術英語学会2021年度年次研究大会 (オンライン開催).
- 藤岡真由美 (2020). 「大学院共通教育英語アカデミックライティング授業—4年間を振り返って」『言語と文化』大阪府立大学高等教育推進機構19, 1-10.
- 水本篤 (2016年3月). 「ムーブと語連鎖を融合させたアプローチによる英語学術論文執筆支援ツールの開発」第二言語ライティングセミナー研究発表 津田塾大学.
- 保田幸子 (2021年9月). 「科学論文における主観と客観：論文の文体分析からみるディスコースの通時的変化」学術英語学会2021年度年次研究大会 (オンライン開催).
- 山西博之 (2021). 「大学院共通科目アカデミック・ライティングにおけるオンライン (オンデマンド) 授業の試み」『JACET 関西支部ライティング指導研究会紀要』14, 7-8.

Abstract

The purpose of this article is to discuss the importance and challenges of research-informed practice to teach a graduate-level English academic writing course by reflecting on the author's six years of experience teaching such a course. First, the definition of English for Academic Purposes (EAP) is provided, and the author's course is reviewed as to how closely it was implemented according to the definition of EAP. Second, the importance of research-informed practice is discussed by presenting an example from the author's course. Throughout the past six years, genre-based approach has been constantly adopted to teach the structural and linguistic features of scientific research papers. Although the author has based her teaching practice on published EAP literature, such as rhetorical move analysis and lexical bundles in the Introduction section of research papers, she needs to constantly update her knowledge about EAP research and put the renewed knowledge into practice.

While the author has already been implementing research-informed practice through the teacher's engagement with research, there is another issue as to whether and what extent EAP teachers can engage in research, in such areas as corpus studies, genre analysis, and investigation of social contexts of academic writing. Conducting research in those areas can pose challenges to EAP teachers due to time constraints and potential problems to obtain students' consent to participate in research and offer their science research writing as data for EAP research. Based on these challenges, EAP teachers' research-informed practice can be more easily conducted by reading EAP research, and moreover having dialogues with EAP practice research. EAP teachers can have dialogues by learning about what and how other EAP teachers in published research teach. The author concludes the article by proposing future practice of exchanging real dialogues among EAP teachers, opportunities which are lacking in Japan, as a means of contributing to the development of graduate-level EAP education.